現代社会における研究者のあり方

東京大学大学院美学芸術学専攻
丁　乙

私は昨年 11 月から今年 8 月まで東京大学東洋文化研究所にある東アジア藝文書院（EAA）という機関で特任研究員として務めた。この約一年間、数多くのイベントに参加し、自らもプロジェクト（＊「東洋美学の生成と進行」というシリーズ講演・討論）を立ち上げたことで、社会連携・研究・教育を総合する機関での学問の可能性に関して広く考える機会に恵まれた。

とりわけ研究や学問のあるべき姿やその意義について考えさせられた。まず、研究のスピードについて。私が以前より慣れ親しんだ人文社会系という伝統的な学問分野や学的環境では、基本的に文献研究が行われており、その性質のゆえか、研究成果の産出スピードは速くはなかったし、おそらく速くなりえないだろう。対照的に、EAA で目にしたのは、新たな学問を開拓するために、必然的に量的にも範囲的にも膨大かつ多様な研究と向き合わねばならず、社会連携からの要求もあるため、素早く発信している姿であった。初めは自分がそのスピードに合わせることができるのか心配していたが、一定の蓄積を持つ研究者ならば、必ず物事に対する独自の視点があり、そこから何らかの感想やコメントを述べられることに気づいた。しかし、それは本当にその発表や研究に対する理解に基づく適切なものであるのか、という別の不信も生じてきた。次第に、着任当初の自己の能力への不安から、学問のあり方についての別の問いが生まれてきた。

また痛感したのは、いわゆる研究のパフォーマンス性である。学生の時に有名な研究者の講演を聴講しに行き、失望した経験が時々あった。著作と比べ、なぜ面白くなかったのかと考えていた。だが現在の自分は、もはや一つ二つの講演で研究者の研究を評価しない。同じ分野内の学者向けの発表と、分野外の学者向けのもの、さらに一般公衆向けのものがあるからである。これらの発表に求められるものは必ずしも一致しておらず、互いに相反する部分も少なくない。人文系の研究の価値は広く発信していかなければ、一種の傲慢なエリート主義に陥りうる。しかしそればかり行えば、現在の社会ではあるいはそれだけで名声や地位を獲得することも考えられ、学者より数的に圧倒的な公衆に認められ、必要性があると判断されることに偏重してしまう、というアポリアが存在するように感じ取れる。

この一年間、学問の可能性に興奮した瞬間は多かったが、他方で虚しさもしばしば感じた。そして、自分がいかなる研究者になりたいのか、また現実的になれるのか、という課題が頭に浮上してきた。これは今後、研究者として現代社会を生きていく上で、重要な課題となるであろう。

＊「東洋美学の生成と進行」というシリーズ講演・討論は、2023 年 1 月から 8 月まで計 6 回を実施した。各回の報告は次のリンクよりご参照いただける。初回は小田部胤久先生、第 2 回は陳望衡

先生、第 3 回は王品先生、第 4 回は Kevin M. Smith 先生、第 5 回は青木孝夫先生、第 6 回は塚本麿充先生。